

H30地域協働研究（ステージⅡ）

H30-II-06 「若者の社会動態の分析と関係人口を機軸とした移住・定住施策の推進について」

研究提案者：盛岡市市長公室都市戦略室

研究代表者：総合政策学部 新田義修

研究チーム員：佐藤俊治・畑澤巧（盛岡市都市戦略室）

<要旨>

盛岡市の人口は2000年をピークに減少に転じており、今後も減少傾向が続くものと見込まれている。特に社会減の要因は「若者の東京圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県をいう）・仙台市周辺への転出超過」にある。盛岡市にあって、高校生が就職・進学のために、また、大学・短大・専門学校の卒業生が就職のために東京圏や仙台市周辺に転出する動きは、1970年代から現在まで継続して進行しており、転職・結婚を契機とした転出も少なくない。また、2000年以降20代半ばから30代女性においては同世代の男性のそれを上回る転出傾向が見られる。

一方で、近年、ライフスタイルの多様化や情報通信技術の進化を背景に、地域や地域の人々と多様に関わる者である「関係人口」の概念に注目が集まっている。地域に何らかの関心を持ち、関与する都市部に住む「関係人口」と地域には多様な「関わりの階段」が認められることから、地域と「関係人口」が継続的かつ複層的なネットワークを形成することによって継続的なつながりの確保や、関わりを段階的に深めることで移住定住に結びつけることの重要性が指摘されている。

本調査研究では、若者を対象としたネットリサーチを実施し、そこから得られたデータを分析して若者の価値観や行動様式の実態を明らかにした。また、東京圏の盛岡出身者などをターゲットとした情報発信やイベント開催を通じて、盛岡の地域特性に応じた「関係人口」を機軸とした政策立案に向けたアプローチの可能性について考察を行った。

1 若者の社会動態の分析

(1)研究の概要（背景・目的等）

盛岡市の社会移動を地域別に見ると、県内他市町村及び宮城県を除く東北に対して転入が超過しており、宮城県及び東京圏に対しては転出が超過している。社会移動を年齢区分別に見ると、15～24歳の年齢区分で県内からの転入超過が、また、20～29歳までの年齢区分で県外への転出超過が見られる。これらのことから、盛岡市から東京圏及び仙台市等の大都市圏に向けて、若者が流出していると考えられる。

大都市圏に若者が流出する理由（総務省, 2018）としては雇用（岩間, 2016）を中心に多くの要因が考えられるため、この研究では、盛岡広域と東京圏の若者に対して同内容のアンケート調査を実施し、若者の価値観と行動様式を比較することで若者の流出要因の分析を行った。

研究の詳細及び若者の流出要因の分析については、平成30年度研究報告書「人口減少社会における若者の地元定着に向けた施策の方向性について（盛岡市まちづくり研究所, 2019）」他（盛岡市まちづくり研究所, 2009）を参照されたい。

なお、本件は一般財団法人静岡経済研究所が行った研究「若年女性の流出問題を考える（岩間, 2016）」を参考として実施したものである。

(2)研究の内容（方法・経過等）

ア 調査方法

インターネットによるアンケート調査

イ 調査実施者

岩手県立大学及び盛岡市が（株）マクロミルに委託して実施

ウ 調査対象

盛岡広域（盛岡市、八幡平市、滝沢市、雫石町、葛巻町、岩手町、紫波町、矢巾町）に在住経験のある15-39歳の男女262名を以下の4つに区分して、進学および就職に関する価値観や行動様式の比較分析を行った。

ずっと岩手盛岡組	岩手県内の学校に進学し、盛岡広域に就職したもの
Uターン組	東京圏の学校に進学し、盛岡広域に就職したもの
進学時流出組	東京圏の学校に進学し、東京圏に就職したもの
就職時転出組	岩手県内の学校に進学し、東京圏に就職したもの

エ 実施時期

2018年7月

オ 設問

- ①属性に関するもの 5問
- ②進学先を選ぶ基準 16項目
- ③仕事を選ぶ理由 27項目
- ④くらしの満足度 30項目（仕事17問、生活13問）
- ⑤まちの魅力 28項目
- ⑥盛岡に住むときに重視すること 30項目

(3)これまでに得られた研究の成果

ア 属性に関すること

・組別の分布は次のとおり。

データの概要

分類	女性	男性	合計
「ずっと岩手盛岡組」 (実数) 126 (%) 75.9	40	24.1	166 100.0
Uターン組 (東京圏) (実数) 12 (%) 63.2	7	36.8	19 100.0
進学時流出組 (東京圏) (実数) 17 (%) 48.6	18	51.4	35 100.0
就職時転出組 (東京圏) (実数) 30 (%) 71.4	12	28.6	42 100.0
全体 (実数) 185 (%) 70.6	77	29.4	262 100.0

出展: アンケート結果より作成。

- ・最終学歴は「ずっと岩手盛岡組」「就職時転出組」では男女とも中学・高等学校が半数を超え、残りを専門学校、短大、大学・大学院で構成している。「Uターン組」「進学時流出組」では男女とも短大、大学、大学院が7割を超え、残りを専門学校が占めている。

イ 進学先を選ぶ基準 (表1参照)

- ・進学のために東京圏に転出した者は男性でおよそ33%、女性で16%存在した。このうち卒業後にUターンしたものは男性で1/5、女性で1/3に過ぎず、多くの若者は東京圏への進学後、そのまま東京圏に住み続ける傾向が強いと言える。
- ・岩手県内の学校に進学した者は男性でおよそ67%、女性で84%存在した。このうち卒業後に東京圏に転出したものは、男性でおよそ1/4、女性で1/5であり、多くの若者は盛岡広域に住み続ける傾向が強いと言える。
- ・男性が進学先を選ぶ基準として、半数以上が“重視した・やや重視した”（以下「重視した」という。）と回答した項目数を区分ごとに比較すると、東京圏に進学した「進学時流出組」が最も多く（13項目）、生活面を含めより多くの希望を持ち且つ満たすことができる能力や経済的背景を有する男性が東京圏に進学する傾向が見られる。次いで重視した項目数が多い「就職時転出組」では、「将来就きたい仕事に必要だから」「将来の選択肢を増やすため」などの項目で半数を超えており、県内他市町から盛岡広域の高校、専門学校、大学等へ進学した後、東京圏へ進出する合目的性を持って進学先を選択している傾向が見られる。また、地元進学し、地元就職した「ずっと岩手盛岡組」では、重視した項目が「実家から通えるから」ほか1項目のみと限定的である一方で、半数以上が“あまり重視していない・重視していない”（以下「重視していない」という。）と回答した項目数が最も多く（7項目）、実家から通う必要がある男性が地元の学校に進学する傾向が見られる。
- ・女性が進学先を選ぶ基準として重視した項目数を区分ごとに比較すると、東京圏に進学し、地元就職した「Uターン組」が最も多く（9項目）、生活面を含め

より多くの希望を持ち且つ満たすことができる能力や経済的背景を有する女性が、一時的に東京圏に進学する傾向が見られる。対称的に、東京圏に進学し、就職した「進学時流出組」では、生活面を重視する傾向は低く、将来の仕事に対する合目的性を持って進学している傾向が見られる。また、地元に進学した「ずっと岩手盛岡組」「就職時転出組」では「実家から通えるから」の項目のみ重視されており、男性と同様、実家から通う必要がある女性が地元の学校に進学する傾向が見られる。

- ・「ずっと岩手盛岡組」と「就職時転出組」で重視した項目を比較すると、「就職時転出組」において「将来就きたい仕事に必要だから」「将来の選択肢を増やすため」などの項目で多く、仕事選択に対する合目的性を持って地元学校を選択している傾向が見られる。

表1 進学先を選ぶ基準

設問	男性				女性			
	ずっと盛岡	Uターン	進学時流出	就職時転出	ずっと盛岡	Uターン	進学時流出	就職時転出
将来就きたい仕事に必要だから			○	○			○	○
興味がある分野を学びたかったから	○		○	○		○	○	○
将来の選択肢を増やすため			○	○		○	○	○
校風や雰囲気			○			○	○	○
就職実績がある			○			○		
実家から通えるから	○	×	×		○	×	×	○
一人暮らしができるから	×		○	○	×		○	×
偏差値が高かったから	×		○		×	×		×
すべり止めで合格したから	×		○	○	×		×	×
知名度やブランド力があつたから			○		×	○		
学費が安かったから		×				×	×	
大都会で生活できるから	×		○		×	○		×
周辺に娯楽が充実しているから	×				×	○		×
オシャレな場所にすぐいけるから	×		○		×	○	×	
先生や親の意見			○			○		
学業以外(スポーツ・趣味)が充実しているから	×	×	○		×	×	×	×
“重視した・やや重視した”=○計	2	0	13	5	1	9	5	5
“あまり重視していない・重視していない”=×計	7	3	1	0	8	4	5	6

ウ 仕事を選ぶ理由 (表2参照)

- ・男性が仕事を選ぶ理由として半数以上が重視したと回答した項目数を区分ごとに比較すると、「進学時流出組」が最も多く（21項目）、「就職時転出組」がそれに次ぐ（20項目）。地元就職をした「ずっと岩手盛岡組」では、「自分にできる仕事だった」「実家から通勤できる」等3項目と少ない。「Uターン組」ではこれに「自分がやりたい仕事だった」を加えて4項目に限られる一方で、重視していない項目が16項目と極めて多い。これらのことから、東京圏の仕事を選択した男性は、より多くの条件を満たす仕事を求めて東京圏に進出し、盛岡広域の仕事を選択した男性は、「実家から通えるから」「盛岡・盛岡周辺にあるから」などの限定的な条件を満たすために地元の仕事を選択したものと考えられる。なお、男性において「ずっと

岩手盛岡組」を除く3区分で「自分がやりたい仕事だった」が重視されている一方で、すべての区分で「自分にできる仕事だった」が重視されていることを鑑みると、地元の学校を卒業し、地元就職した男性では自分のやりたい仕事を得られず、妥協の結果として仕事を選択している可能性が示唆される。

・女性が仕事を選ぶ理由として半数以上が重視したと回答した項目数を区分ごとに比較すると、「Uターン組」が最も多く（14項目）、次に「進学時流出組」（13項目）が続き、「ずっと岩手盛岡組」が最も項目数が少ない（7項目）。これらのことから、東京圏で教育を受けた者など高等教育を受けた者が、より多くの条件を満たす仕事を得られている可能性が示唆される。なお、女性のすべての区分で重視された項目は、「自分がやりたい仕事だった」「自分にできる仕事だった」「仕事の安定性」「時間のゆとり」の4項目あり、男性にくらべると女性のほうが

表2 仕事を選択する理由

設問	男性					女性				
	盛岡 ずっと	ター U	流 出	進 学 時	就 職 時	盛岡 ずっと	ター U	流 出	進 学 時	就 職 時
自分がやりたい仕事(業種・職種)だった		○	○	○	○	○	○	○	○	○
自分にできる仕事だった	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
周囲の人の期待に沿う仕事だった		×	○	○		×				
高収入		×	○			×				
仕事の安定性			○	○		○	○	○	○	
仕事の成長性		×	○	○		○	○			
仕事の専門性・先進性・高度性			○	○		○			○	
時間のゆとり(労働時間、休暇)		×	○	○		○	○	○	○	
福利厚生が整っている		×		○		×			○	
転動がない			○	○		○		○	○	
知名度や規模		×	○	○		×	×	○		
社風や雰囲気合う		×	○	○		○	○			
職場の人間関係がよい		×	○	○				○		
女性や若者が活躍できる		×	○			○				
世間や周囲の評判がよい		×	○	○		○	×			
親など周囲の意見		×	○	○		×			×	
自分の経験や知識を活かせる			○	○		○	○	○		
高度なスキルや経験を身につけることができる、成長できる			○							
社会に貢献できる、人の役に立つことができる		×	○			○				
自分が持っている能力を発揮して活躍できる			○	○		○	○	○		
盛岡・盛岡周辺にある	○	○				○	○			
首都圏・大都市にある	×	×	○	○		×	×	○	○	
実家から通勤できる	○	○				○	○			
ひとり暮らしができる				○		×	×	×		
趣味・社外活動がしやすい		×	○	○		○	○			
近隣に娯楽が充実している		×	○			×	×			
パートナーの意向		×				×				
“重視した・やや重視した”=○計	3	4	21	20	7	14	13	10		
“あまり重視していない・重視していない”=×計	1	16	0	0	5	8	1	1		

より多様な面を評価している傾向があることが伺える。

エ 暮らしの満足度 (表3参照)

- ・男性が暮らしの満足度について半数以上が“満足・やや満足”(以下「満足」という。)と回答した項目数を区分ごとに比較すると、「就職時転出組」が最も多く(29項目)、「進学時流出組」がそれに次ぐ(17項目)。地元就職をした「ずっと岩手盛岡組」「Uターン組」は、それぞれ満足している項目が2項目と少ない。Uターン組」では半数以上が“やや不満・不満”(以下「不満」という。)と回答した項目が出現しており、東京圏に就職した男性は暮らしの満足度が高く、地元就職した男性は暮らしの満足度が低い傾向が見られる。

表3 暮らしの満足度

設問	男性					女性				
	盛岡 ずっと	ター U	流 出	進 学 時	就 職 時	盛岡 ずっと	ター U	流 出	進 学 時	就 職 時
(仕事)希望の業種や職種	○			○	○	○	○	○	○	○
(仕事)働きがい、仕事の面白さ	○			○	○	○	○	○	○	○
(仕事)収入、給与					○	×	×			
(仕事)安定性		○	○	○				○	○	
(仕事)成長性				○	○					
(仕事)先進性・高度性				○			○			
(仕事)時間のゆとり(労働時間、休暇)		×	○	○		○	○	○	○	○
(仕事)福利厚生			○	○			×			
(仕事)社風や雰囲気		×		○		○	○			
(仕事)職場内での地位、評価				○				○		
(仕事)職場内での人間関係				○	○			○	○	
(仕事)知名度や会社の規模				○	○			○	○	
(仕事)女性や若者が活躍できる				○			○		○	
(仕事)自分の経験や知識を活かせる		○	○	○		○		○	○	
(仕事)高度なスキルや経験を身につけることができる			○	○						
(仕事)社会に貢献できる、人の役に立つことができる			○	○				○	○	
(仕事)自分が持っている能力を発揮して活躍できる			○	○				○	○	○
(生活)趣味・社外活動の充実			○	○				○	○	
(生活)趣味・社外活動における人間関係				○				○		
(生活)友人関係				○		○	○	○		
(生活)パートナー(出会い)				○				○	○	
(生活)レジャー・娯楽・あそび				○	○				○	○
(生活)買い物、ショッピング			○	○		○		○	○	○
(生活)住居の広さ			○	○		○		○	○	○
(生活)通勤				○				○		
(生活)食生活				○	○			○	○	○
(生活)居住費(家賃、住宅ローン)									○	
(生活)生活費(居住費以外)					○				○	
(生活)親・親族との人間関係				○					○	○
(生活)町内会・近所づきあいなど地域の人間関係、助け合い				○						
“満足・やや満足”=○計	2	2	17	29	7	12	21	15		
“やや不満・不満”=×計	0	2	0	0	1	2	0	0		

・女性が暮らしの満足度について半数以上が満足と回答した項目数を区分ごとに比較すると、「進学時流出組」が最も多く（21項目）、「就職時転出組」がそれに次ぐ（15項目）。地元就職をした「ずっと岩手盛岡組」と「Uターン組」では満足している項目が少ないなどその傾向は類似しているが男性ほど大きな乖離は生じていない。特に「ずっと岩手盛岡組」では、「友人関係」「住居の広さ」「食生活」など、生活面の一部に満足している傾向がみられる。また、地元就職した者では、「収入・給与」に不満を抱いている傾向が見られる。

オ 住んでいるまちの魅力（表4参照）

・男性が住んでいるまちの魅力について、半数以上が

“とてもそう思う・ややそう思う”（以下「魅力的である」という。）と回答した項目数を区分ごとに比較すると、「就職時転出組」が最も多く（25項目）、「進学時流出組」がそれに次ぐ（18項目）。地元就職をした「Uターン組」が魅力的であると考える項目は1項目（「自然環境に恵まれている」）である一方、“あまりそう思わない・まったくそう思わない”（以下「魅力的でない」という。）が半数を占める項目が11項目存在している。東京圏に就職した男性は、自らが住むまちを魅力的と考えている一方で、地元就職した男性は自らが住むまちを魅力的と考えておらず、殊に東京圏に居住経験のある「Uターン組」でその傾向が顕著である。

・女性が住んでいるまちの魅力について魅力的であると

表5 盛岡に住むときに重視すること

表4 住んでいる街の魅力

設問	男性				女性			
	ずっと盛岡	Uターン	流出時	就職時	ずっと盛岡	Uターン	流出時	就職時
通勤・通学がしやすい	○		○	○	○		○	○
働く場の選択肢が多い		×	○	○		×	○	○
働く場で育児や介護への理解や制度が充実している			○	○			○	
働く場で若者や女性が活躍している			○	○			○	
収入の水準が高い	×	×	○	○	×	×		
食べ物おいしい	○		○	○	○	○	○	
自然環境に恵まれている	○	○	○	○	○	○		○
気候がよい	○		○	○	○		○	○
日常の買い物の利便性が高い			○	○	○	○	○	○
まちの景観・町並みがよい	○			○	○		○	
公共交通機関が充実している		×	○	○		○	○	○
物価が安い				○		×		
住んでいるまちの魅力		×	○	○		×	○	○
住んでいるまちに創造性や機能性がある		×		○		×	×	
落ち着いた環境・安心がある	○		○	○	○		○	○
まちに知名度やブランド力がある		×	○	○		×	×	
まちのお祭り、イベントに参加できる		×					○	
魅力的なパートナーとの出会いがある						×		
グルメ・飲食店が充実している			○	○		×		○
趣味の選択肢が充実している				○				
スポーツ・文化施設が充実している		×	○	○		×		
旅行やレジャーの選択肢が充実している		×		○		×	×	○
子育て支援、子育て施設が充実している		×	○	○				
教育支援、教育施設が充実している			○	○				
医療支援、医療施設が充実している			○	○				
介護支援、介護施設が充実している		×						
親・親族との関係性を保ちやすい								
他者から干渉されない、匿名性がある				○			○	
町内会・近所づきあいなど地域の人間関係・助け合いが良好				○				
“とてもそう思う・ややそう思う”=○計	6	1	18	25	7	4	13	10
“あまりそう思わない・まったくそう思わない”=×計	1	11	0	0	4	10	0	0

設問	男性				女性			
	ずっと盛岡	Uターン	流出時	就職時	ずっと盛岡	Uターン	流出時	就職時
通勤・通学がしやすい					○		○	○
働く場の選択肢が多い					○		○	○
働く場で育児や介護への理解や制度が充実している					○		○	○
働く場で若者や女性が活躍している								
収入の水準が高い			○				○	○
安定した仕事に就ける			○		○		○	○
成長性がある仕事に就ける								
専門的・先進的・高度な仕事に就ける								
時間や空間にゆとりがある			○		○	○	○	○
自然環境が豊かだ								○
気候があっている							○	
日常の買い物の利便性が高い					○		○	○
まちの景観・街並みがよい			○					
公共交通機関が充実している			○				○	
物価が安い							○	
住んでいるまちの魅力								
住んでいるまちに創造性や機能性がある								
落ち着いた環境・安心がある					○			
まちに知名度やブランド力がある								
まちのお祭り、イベントに参加できる								
魅力的なパートナーとの出会いがある								
趣味の活動が行いやすい			○	○				
子育て支援、子育て施設が充実している								○
教育支援、教育施設が充実している								○
医療支援、医療施設が充実している								○
介護支援、介護施設が充実している								○
親、親族からの支援や資産の活用が期待できる								
親、親族の世話、介護を行う必要性がある								
町内会・近所づきあいなど地域の人間関係・助け合いが良好だ								
盛岡在住の友人関係が良好だ				○				
“重視する・やや重視する”=○計	0	0	6	2	7	1	12	11
“あまり重視しない・重視しない”=×計	0	0	0	0	0	0	0	0

回答した項目数を区分ごとに比較すると、「進学時流出組」が多く（13項目）、「就職時転出組」がそれに次ぐ（10項目）など、傾向は男性と同様であるが、男性ほど大きな乖離は生じていない。

- ・地元就職した者が魅力的と考えている項目として、「通勤・通学がしやすい」「食べ物がおいしい」「自然環境に恵まれている」「気候がよい」「日常の買い物の利便性が高い」「まちの景観・町並みがよい」「落ち着いた環境・安心がある」が上げられる。

カ 盛岡に住むときに重視すること（表5参照）

- ・盛岡に住む（住み続ける）ときに重視することについて、4割以上が“とてもそう思う・ややそう思う”（以下「重視する」）と回答した項目数を区分ごとに比較すると、「進学時流出組」「就職時転出組」の項目数が多く、女性で顕著であり、これらの区分では盛岡に住むにあたってハードルとなる条件が多いことが示唆される。
- ・複数の区分で重視されている項目としては、「通勤・通学がしやすい」「働く場の選択肢が多い」「働く場で育児や介護への理解や制度が充実している」「収入の水準が高い」「安定した仕事に就ける」「時間や空間にゆとりがある」「日常の買い物の利便性が高い」「公共交通機関が充実している」「趣味の活動が行いやすい」「医療支援、医療施設が充実している」などがあげられる。

キ まとめ

- ・進学した地域で就職する比率が高いことから、地元への進学率を高めることで東京圏への転出を減少させ、定住する若者の増加を見込むことができる。このためには、「将来就きたい仕事に必要なから」「興味がある分野を学びたかったから」「将来の選択肢を増やすため」などの条件を満たす専門学校や大学など進学先の選択肢を増加させるほか、当該教育機関の認知度の向上により地元進学率を上昇させるなどの方法が考えられる。
- ・仕事を選択する理由について、地元就職と東京圏への就職を比較すると、東京圏に就職した者が多くの項目を評価していることから、地元企業の多様な要素の磨き上げを図るほか、地元企業や企業の取組について認知度を向上させることが効果的と考えられる。また、妥協の結果として地元企業に就職している者もいると考えられることから、多様な働く場所の確保が必要であると考えられる。
- ・暮らしの満足度では、東京圏に就職した者の満足度が高く、地元就職した者の満足度が低い。特に女性で地元就職した者は「収入・給与」に不満を抱いているため、労働生産性の向上に取り組み、賃金の上昇を図る必要がある。

- ・盛岡に住むときに重視するものとして、「通勤・通学がしやすい」「働く場の選択肢が多い」「働く場で育児や介護への理解や制度が充実している」「収入の水準が高い」「安定した仕事に就ける」「時間や空間にゆとりがある」「日常の買い物の利便性が高い」「公共交通機関が充実している」「趣味の活動が行いやすい」「医療支援、医療施設が充実している」が挙げられており、これらの充実を図ることで、移住・定住の環境を整えることができる。
- ・地元就職を左右するファクターとして実家の存在が大きいことから、将来のUターンを増やすため東京圏在住者に対して実家との同居・近居を支援する施策が有効であると考えられる。
- ・東京圏に住む者は、おしなべて仕事や生活の満足度が高く、盛岡への移住のハードルは高いと考えられることから、東京圏に在住し続けながら「関係人口」施策を通じて継続して盛岡に関わりを持ち続けてもらうことで、将来の移住・定住者のすそ野の拡大に取り組むことが有効であると考えられる。

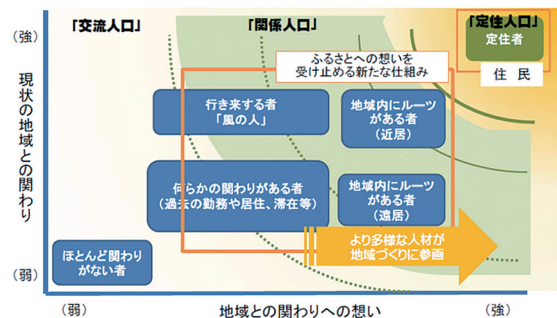
2 関係人口を機軸とした移住・定住施策の推進

(1)研究の概要（背景・目的等）

総務省によれば、図1に示されるように、「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のことを指し、地方圏においては、人口減少・高齢化により、地域づくりの担い手不足という課題に直面しているが、地域によっては若者を中心に、変化を生み出す人材が地域に入り始めており、「関係人口」と呼ばれる地域外の人材が地域づくりの担い手となることが期待されるとしている。

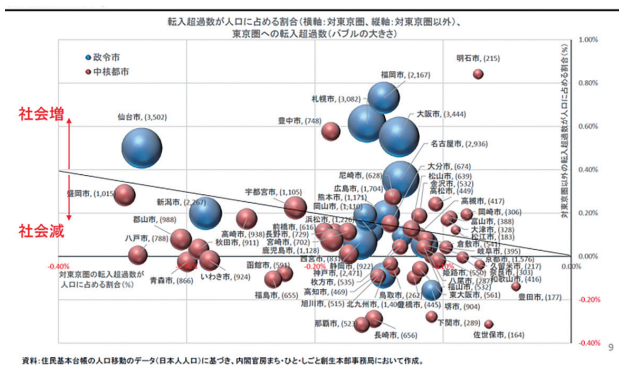
盛岡市においては、対東京圏への転出超過が拡大傾向にあるほか、図2に示されるように2017年においては、対東京圏への転出超過数の人口当たりの割合が全国1位となるなど、地方創生の推進にあたり若者の地元定着や移住・定

図1 関係人口のイメージ



出典：総務省「これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書-「関係人口」の創出に向けて-（総務省, 2018）」から引用。

図2 東京圏以外の政令市、中核市の移動状況 (2017年)



出典:住民基本台帳移動データ(日本人人口)に基づき、内閣官房まち・ひと・しごと創成本部作成のものを用いる。

住の促進は重点的に取り組む事業として位置付けられる状況にある。

こうした状況下において、盛岡出身の若年層が東京圏に一定数存在することが想定されることや、盛岡市が2018年に転出者に対して実施したアンケートから、転出後も盛岡との関わりを持ちたいと回答した者が8割程度となっていることなどから、盛岡市の移住・定住促進においては関係人口に着目した取組となっている。

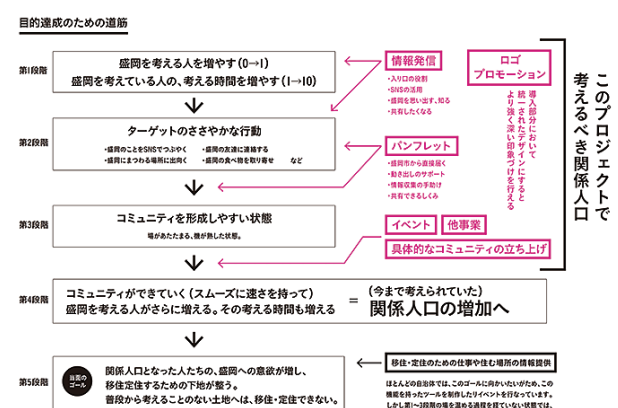
ここでは盛岡市が地方創生推進交付金事業の採択を受けて実施する東京圏の盛岡出身者などをターゲットとした情報発信やイベント開催などの実践的な機会を活用し、以下の観点から盛岡の地域特性に応じた「関係人口」を機軸とした政策立案に向けたアプローチの可能性について考察を行った。

- ①「関係人口」の把握方法
- ②盛岡における「関係人口」の分類化と対象設定
- ③盛岡との関わり方の深まりと行動変容の要因
- ④盛岡市外にしながらも、継続的な関わりを持つことができる仕組みの構築

なお、盛岡市が実施する「関係人口の増加を機軸とした移住・定住・交流人口対策事業(盛岡という星でプロジェクト)」においては、図3に示すように、関係人口を広く捉え、具体的な行動を起こしていないものの盛岡に関連したテーマなどに興味関心がある層も対象とし、関わり方の意識や行動の度合いに応じて、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)などによる情報発信、紙媒体によるパンフレット(盛岡という星でビジュアルブック)の配布、イベント開催、コミュニティ活動支援、移住体験ツアーの実施、移住相談支援のアプローチを行うなど対象の段階に応じた取組体制となっている。

このプロジェクトでは東京圏へ転出した若年層が早い段階で盛岡での暮らしに対し興味関心を抱き、また、継続的に持ち続けることで、結婚や子育てなどの今後のライフ

図3 盛岡という星でプロジェクトのターゲットイメージ



出典:合同会社ホームシックデザイン作成

ページの変化を機に盛岡への移住を選択肢に入れられるよう、東京圏にしながら盛岡の情報を得たり、関わるができる機会の提供に重きを置いていることが特徴と言える。

(2)研究の内容(方法・経過等)

盛岡という星でプロジェクトの関連事業において実施されたイベント開催時等にアンケート調査、ヒアリング調査などを実施した。

①調査を実施した主なイベント等

- ・2018年8月12日～13日(盛岡市内)
帰省者向けUターンセミナー・相談会(ヒアリング)
- ・2019年2月2日(東京都内)
盛岡という星の引力vol.1(アンケート1、ヒアリング)
- ・2019年3月23日(仙台市内)
岩手わかすゼミ(ヒアリング)
- ・2019年4月11日～5月18日
盛岡という星でビジュアルブック先行配布(アンケート2)
- ・2019年7月31日(東京都内)
盛岡という星でセミナー・交流会(ヒアリング)
- ・2019年11月9日(東京都内)
リトルもりおかサミットイベント(アンケート1)
- ・2019年12月15日(東京都内)
リトルもりおかサミット(アンケート1)
- ・2020年1月18日(東京都内)
岩手わかすフェス2020(アンケート1)
- ・2020年1月26日～27日(盛岡市内)
盛岡市関係人口勉強会(有識者ヒアリング)
- ・2020年2月1日(東京都内)
盛岡という星でクリエイターズトーク(アンケート1)
- ・2020年2月15日(東京都内)
盛岡という星の引力vol.2(アンケート1、ヒアリング)

②対象者数

- ・アンケート1 264人

- ・アンケート2 529人
- ・ヒアリング 一般 96人 有識者 1人

③主な項目

- ・アンケート1
 - ふるさと納税の経験、関心のあるテーマ、盛岡とのつながり、盛岡来訪の機会など
- ・アンケート2
 - 所在地、出身地、盛岡とのつながり、盛岡来訪の機会、盛岡という星でプロジェクトの印象など
- ・ヒアリング（一般）
 - 東京圏における生活満足度、就職した理由、今後の盛岡への関わり方、Uターンの可能性など
- ・ヒアリング（有識者）
 - 福岡市における事例など

(3)これまで得られた研究の成果

調査結果を踏まえた各観点からの成果については次のとおりである。

①「関係人口」の把握方法

このプロジェクトにおいては、関連するイベント、補助事業、ふるさと納税などを通じて、本人同意を得ながら、関係人口の把握を試みたものであり、氏名のほか、住所、電話番号、メールアドレスのいずれかの方法で連絡が取ることが可能なものを把握した関係人口としており、2020年3月末時点で、2,064人となっている。ヒアリング調査を通して、このように関係人口として個人情報把握されることについては、行政や関係団体からの情報提供がいち早く受けられるなどの前向きに受け止める意見が多い一方で、個人情報を把握されることに対する抵抗感を示す声も確認された。

このプロジェクトでは、イベント参加者や、ビジュアルブックの配布など、関連事業を通じて個人を把握したが、これは広がりには限界がある。他の自治体をみると、「ふるさと住民票」と称されるような地域外の方がその地域との関わりを意思表示できる仕組みを設けているケースもある。こうした取組も有効性がある一方で、取得によるメリットをどのように感じてもらえるようにするか課題も残されている。

また、このプロジェクトでは、情報発信やコミュニケーションの場として、SNSを活用している。詳細は後述するが、ここでの参加者を関係人口として把握できるようになれば、効率的な把握手段となる。こうしたアプローチについては、運営側として個人の属性を把握には限界があるが、個人の判断により参加できる環境であることや、積極的な関わりを持つ機運を醸成する場としても可能性があり、個人情報を把握されることを前向きに捉えられる機会の1つとして、SNSにおけるコミュニケーションの場づくりの効果的な運用方法を模索する余地が残されている。

②盛岡における「関係人口」の分類化と対象設定

このプロジェクトでは、U・Iターンの区分（盛岡との縁の有

無）と都会での暮らし・農村での暮らしの区分（都市機能の高さや自然環境の度合い）で分類すると、Uターン・都市での暮らしという分類に重きをおいており、具体的には盛岡出身であることや、就学や就職など盛岡に居住した経験がある若年層などで、暮らしに一定の都市機能を求める者をメインターゲットとした。また、その対象設定を、第1段階として普段から盛岡の関わりを意識しておらず、また情報にもあまり触れることがない層、第2段階として盛岡の情報を意識的に収集している層、若しくは収集しはじめようとしている層、第3段階として盛岡との関係性を持ちたいと考えている層、第4段階として盛岡との関係性を持つための活動を行っている層、第5段階として移住意欲が高まっている層、若しくは移住に向けた活動に向けた準備が整っている層に分け、図3で示したように、各層に向けた事業展開を行っている。

こうしてターゲットを明確にした上で事業展開を行うことで、対象者に響くアプローチが可能になった。詳細については後述するが、第1段階や第2段階の層を対象としたSNSを活用した情報発信などで一定の成果をあげており、このことがプロジェクトの関連事業への期待へとつながっていることがヒアリング調査により確認できた。また、メインターゲットではない盛岡と縁のない対象者にとっても、観光要素の強い情報ではなく、盛岡の暮らしに関する要素の強い情報は、地方の暮らしに興味関心が高い層や、何らかの理由で盛岡に興味を持っている層にも、観光情報ではない、地域に暮らしていることだからこそ分かる情報に価値を感じるケースが多いことが確認できた。

③盛岡との関わり方の深まりと行動変容の要因

前述したようにこのプロジェクトでは、盛岡との縁などのほかに、現在の意識や活動状況により5つの段階に分けて対象設定を行っており、この段階は個人の盛岡との関係の深まりの状況に応じて、階段を上がるように変化していくことを想定し、設定しているものである。

このプロジェクトを実施する中で、SNSやビジュアルブックの情報を得て、この事業に関連したイベントに参加したケースが一定数みられたほか、さらにはコミュニティ活動への参加、若しくはコミュニティの立ち上げに成功するという事例が生まれるに至った。

こうした事例では、具体的な活動事例に触れることで、東京圏での暮らしを続けつつも、ふるさとである盛岡とのつながりをより感じる場を持ちたいという想いを強くする機会となり、また、具体的な行動変容に至るにあたり、その想いを外に向けて発信したこと、その行動を後押しする仲間を集めることができる場の存在が大きかったことがヒアリング調査で確認できた。

一方で、SNSのフォロワー数が増加傾向にあることから、比較が難しいところであるが、情報発信に対する反応についてみると、イベント告知については他の一般的な投稿より1割から2割程度にとどまっていることから、盛岡の暮らしを感じる事ができる投稿に対するニーズに対し、イベント参加のように能動的な行動を要する情報提供

に積極的な姿勢が一定数みられるようになるには時間をかけて観察していく必要がある。また、対象設定における第1段階や第2段階の層に対する、SNSを活用した情報発信やビジュアルブックの配布に対する反響の大きさに比較すると、第3段階以降の層の反響は比較的小さなものにとどまっている。これは前者が時間的な制約がほとんどないのに対し、後者は日時が限られる、イベント会場に出向く必要がある、面識のない者との交流があるなど、参加し慣れた者にとっては問題にならないことも、こうした場に参加し慣れていない者にとっては大きな壁になっていることが確認できた。

④盛岡市外にいなながらも、継続的な関わりを持つことができる仕組みの構築

このプロジェクトでは、Instagram、facebook、twitterなどのSNSを活用し、日常の中に盛岡の情報が入る機会を作ることで、継続的な関わりを考える入り口づくりを行いながら、コミュニケーションの場づくりとして、イベント開催やコミュニティ活動の場の提供を行うことで、継続的な関わりを持つ機会を提供するなど、関係人口の増加に向けた取組を体系化したものである。

Instagramアカウントは、事業実施当初の2018年12月から運用をスタートしており、2020年3月末時点でフォロワー数が7,500を超えるなど、一定程度の効果を上げている一方、同時期に運用をスタートしたfacebookアカウントは、フォロワー数が1,000程度にとどまっている。また、twitterにおいては運用開始が遅かったことから、フォロワー数が500程度にとどまっている。また、いずれのSNSにおいても、運営側とフォロワー側、若しくはフォロワー同士が、双方向のコミュニケーションを図る環境を整える状況に至っていない。

また、イベントやコミュニティ活動については、アンケートやヒアリング調査から、コミュニケーションの場として、一定程度機能していることが確認できた。

一方で、コミュニケーションの場として、対面式のイベントの開催が主になることで、参加の機会も限られることや、参加のハードルが高いことなど、継続的な仕組みとして現状の形には課題が残るが、これに代わるアプローチについては今回の調査研究からは見出すことができなかった。

3 今後の具体的な展開

今回の調査研究の結果などを踏まえながら、以下の観点から、実践の機会を活用し、継続的な調査研究を進めるものである。

①関係人口の積極的な把握

このプロジェクトでは、関連するイベントに参加された方などを関係人口として把握してきたが、このプロジェクトを介せずして、関係人口として、継続的な関わりを持っている方も多数存在することが想定される。こうした動きを定量的、定性的に評価できるよう、具体的な仕組み、例えばブロックチェーンを活用した地域通貨など行政が一元

的に情報管理する手法以外も含めて検討していくものである。

②盛岡における「関係人口」の分類化と対象設定

このプロジェクトでは、対象設定において、第3層以降の盛り上がり、若しくは第1層、第2層から第3層へのステップアップに課題が残された。

事業を効果的に実施するために、段階的な対象設定をしているが、シームレスな行動変容が可能となる事業設計のほか、段階的な対象設定における限界も含めて、アプローチを試行しながら、多様な視点から今後検討していくものである。

③行動変容の機会となる盛岡関連コミュニティ活動の活性化

リトルフクオカのように、その地域に関連したキーワードで形成されるコミュニティがインフォーマルな形で形成され、気軽に参加できる場が増えていくことで、関係人口はより定量的に把握しやすくなることが期待される。また、こうした中で、行動の有無に関わらず、個人の地域との関わりに対する意思を健在化させるとともに、親類や友達などの身近な人を含めて外部に意思表示することが、個人が漠然と抱えるふささへの想いを形にする機会につながることを期待できることから、多様なテーマによる機会の創出のあり方について検討していくものである。

④関係人口をつなぐ仕組みづくり

関係人口に関する取組は、それを把握するための制度設計が難しい取組であるが、オンライン・オフライン、フォーマル・インフォーマルと相対するものも含めて、多様な視点からその仕組みづくりを構築する必要があると考えられることから、SNSやオンラインとイベントを組み合わせ合わせたアプローチなど、持続可能な仕組みについて検討していくものである。

⑤盛岡側における受け皿づくり

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、地方移住の機運が高まりつつあることから、今後は、盛岡側の受け皿づくりがより肝要となるため、雇用だけにとどまらず、都市機能や自然環境など暮らしという大きな枠組みで、盛岡側での受け皿づくりのあり方を検討していくものである。具体的には、「連携中核都市圏構想(辻, 2015)(外川, 2016)」や「2010年の人口移動からみた日本の都市システムの地域政策(森川, 2016)」に注目して想定した「みちのく盛岡広域連携都市圏ビジョン(盛岡市役所, 2020)」や「第2期盛岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略(盛岡市, 2020)」の見直しにおいて検討していきたい。

4 参考文献

外川 伸一(2016)「「地方創生」政策における「人口のダム」としての二つの自治制度構想：連携中核都市圏構想・定住自立圏構想批判」『大学改革と生涯学習：山梨学院生涯学習センター紀要』(20)：31-48。
岩間 晴美(2016)「特集 若年女性の流出問題を考える」『SERIマンスリー：明日の地域と企業の情報誌』54

(8) : 6-17.

森川 洋 (2016) 「2010年の人口移動からみた日本の都市システムと地域政策」 『人文地理』 68 (1) : 22-43. http://doi.org/10.4200/jjhg.68.1_22.

盛岡市まちづくり研究所 (2009) 『研究報告書』 盛岡市.

盛岡市まちづくり研究所 (2019) 『人口減少社会における若者の地元定着に向けた施策の方向性について』 盛岡市.

盛岡市 (2018) 『盛岡市へのU・Iターン、盛岡との関わりに関する意識調査報告書』 盛岡市.

盛岡市 (2020) 『連携中枢都市圏ビジョン』 盛岡市.

総務省 (2018) 『これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書：「関係人口」の創出に向けて』 総務省

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部 (2018) 『中枢中核都市の現状』 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部地域未来創造有識者会議

辻 琢也 (2015) 「連携中枢都市圏構想の機制と課題：～超高齢・人口減少社会のまちづくりを誘導する新しい地方行財政制度～」 『日本不動産学会誌』 29 (2) : 49-55.

http://doi.org/10.5736/jares.29.2_49.

謝 辞

本研究にあたり、インタビュー調査、アンケート調査にご協力いただいた皆様や、本研究の指針を示し伴走していただいた植田真弘名誉教授に心から感謝申し上げます。